



NO. 689

発行 埼玉高等学校教職員組合

〒330-0062

さいたま市浦和区仲町3-13-10

ヤギシタビル4F



教育復興に向けて支援の輪を広げよう！

TEL 048-823-4071

FAX 048-823-4072

Eメール saikojtu@maple.ocn.ne.jp

就職戦線異状あり！ ～就職試験の複数応募可について考える～

◆変更の経緯

令和6年11月18日に「令和6年度埼玉県高等学校就職問題検討会議」が行われた。この会議は、学校関係者、経営者団体、雇用支援団体、埼玉県、埼玉県教育局、さいたま市、埼玉労働局から構成されている。その会議の中で、「令和7年度における申し合わせ事項及び確認事項」の方向性についての指針が示された。（詳しくは、埼玉県労働局のホームページをご覧ください。）

ここで示された【会議要旨（主な確認事項）】を要約すると。

- ・令和7年度については、原則2社まで推薦開始日から複数の応募・推薦を可能とする。
- ・企業については、複数応募を可能とするか、単願応募のみを可能とするかを選択できる。
- ・生徒については、複数応募を可能とした求人に対してのみ併願できる。
- ・県外の求人に応募する場合は、応募先の都道府県の申し合わせに従う。

と示されている。また、2月頃にはこの指針を取りまとめたマニュアルが出されるという。

◆現場の負担は？

この指針が出た背景は、複数社応募ができることにより、職業選択の幅が広がり、ミスマッチの職業選択を防ぐことができる。それにより、若年層の短期離職を防ぐことができるという意図があるようだ。

はたして、この1人複数社応募で事態は解決するのでしょうか。そして現場に新たな混乱と仕事量の増加が見込まれてしまうのではないだろうか。

◆考えられる弊害

まず学校は、職場見学や入社試験に際しては、企業と連絡を取り合い、日程調整や生徒への連絡を行っている。また、企業に送り出す際には、しっかりと事前・事後指導を行い送り出している。これが1人2社になれば、仕事量は倍になってしまう。

次に複数応募可能な企業の入社試験日は、企業同士が話し合い、日程調整をしてくれるのか。結局、複数応募可能をうたっても就職試験解禁日の9月16日に一斉に就職試験を行えば、実質1社しか受験することしかできなくなる。今までと何も変わらなくなる。

最後に複数社の内定を頂いた場合、入社しない企業への断りは、どうするのか。学校がやらなければいけないのか。断ったことにより、企業への信頼を失ってしまうのではないのか。懸念事項は、いくらでも湧いてくる。

この人手不足の中、企業は人材が欲しくてたまらない。入社するかわからない人材に企業はお金と時間を使うのだろうか。確実に入社してくれる指定校求人が増えるのではないか。また、結局生徒は1社しか受験しないのではないか。という予想も出ている。

◆ミスマッチを無くすには・・・

筆者は、大学などのオープンキャンパスのように学校を通さずに気楽に何社も会社見学をして、納得したうえで1社を受験する。そのやり方を確立出来たら、ミスマッチの職業選択が無くなるのではないかなと思う。

はたして、令和7年度の就職戦線はどうなるのか。見守っていききたいものである。

近場でのお喋りが明日の活力へ！ 支部活動のススメ

今、職場はどこも忙しい。肉体的な疲労はもとより、精神的な消耗と言った感じの日々が続く。老若男女を問わず、愚痴や疑問は溜まる一方だ。

精神の安定を保つには、それらを吐き出すに限る。だが、職場にはそのような余裕もなく、どこぞの大統領ではないが、職場にも自分ファーストの風潮が漂い、協働という言葉が死語になりつつある気がしてならない。

そんな中、本音で語れる仲間に出会って、中央(浦和)で行われるくじらの会議に出るのは、残念ながらなかなかしんどい。せめて土日くらいは休みたいという気持ちが先立つ。また、そのたまの休日にも部活や補習に動員させられる若者もいる。

近場なら往復の時間が省け顔を出せる。ここに支部で集まる大きなメリットがある。隔月で常時10名近い仲間が集まり、退勤後にお弁当を囲みながら、或いは長期休業中にグラスを傾けながら、日頃の想いを吐露できる空間を実現している支部もある。

そんな集まりで仲間から出された？と嘆きを読者と

共有したい。

○分掌委員会が解散した。委員会ではまとめきれなくなった。また、職場の親睦会に入らない教員がいる。年末の忘年会は4分の1の参加しかなかった。

○仕事をする人、しない人の二極化が激しい気がする。生徒指導の場面で、教頭や学年主任の傍観者的な態度に希望を失った。

○民間から来た新採用の教員が12月末で退職した。同じ教科だったが、突然のことだった。

○校長は始業数分前に出勤し、チャイムと同時に退勤する。働き方改革は、校長だけが実現している。

○ある分掌が若手ばかりで構成され、仕事が回っていない。根回しが出来ていないようだ。

読者もうなづく事例がいくつもあるのではなかろうか。ラインに調整さん、日程調整をするには便利な手段が今はある。支部担当の中執と連絡を取り合いながら、近場で気軽に話せる空間、ひと時を実現してみたいだろうか。それが明日も職場に向かう活力になると信じている。

先日、埼玉新聞の一面に県立学校の再整備を進める記事が掲載された。それによれば最大で19校減るようである。

昨年末に川口市立高校の定時制課程が今年度の入試をもって募集停止になることが決まった。まず、閉課程となることを市教委の担当者が教員にむけて説明をした。説明を聞く限り、ほとんどのことが未定の状態でこれからどうするか具体的に決めていくようであった。

後日、生徒、保護者にむけて説明会が開かれた。ほぼ全校生徒が参加し、保護者も数名参加した。先日の教員向けの説明会では、ほとんど説明になっていなかったが、一体何を話すのかと聞いていたら、酷いものであった。

昨今、勤労学生は減少し、定時制の当初の役割をはたしていないので閉課程になるということ

述べ、早々に会を切り上げようとした。さすがにこれには生徒も保護者も不満をあらわにした。あまりに酷すぎるので、質疑応答の時間を設けてもらった。

この学校だから通えると言っていた我が子は、なくなると知って塞ぎこんでいます。少数だが、弱い立場の人のことは考えないのか？との質問に市教委はお茶を濁していた。

この閉課程の決定は、どう考えても少数派の子どものことは考えていないものである。公教育が少数派の子どもを切り捨てたら、誰がその子どもたちのことを考えるのだろうか。少数派の子どものもとも考えられるのが公教育であると思っていたが、どうやら違うのかもしれない。

今後の再編整備で少数派の子どもたちが切り捨てられないことを祈りたい。

